

4. 子どもが健やかに育つまちに

みんなで支える学校、みんなで育てる子ども ～学校支援地域本部事業～
読書の楽しさを伝えたい！ ～ブックトークボランティア派遣事業～
おもてなしの心で道路清掃 ～マイロード事業～
高校生もまちづくりの一員 ～大野みんなのまつり～
親子で楽しい交流を！ in 原地区 ～はらきっず～
コロナ禍の子育てを応援したい！ ～オンライン離乳食相談～

みんなで支える学校、みんなで育てる子ども

～ 学校支援地域本部事業 ～

■ 事業概要

info

学校支援地域本部事業は、学校の教育活動を地域の皆さんが支援する、いわば「地域につくられた学校の応援団」です。具体的には、書写の筆の持ち方や、家庭科の玉止め・玉結びなど、一人ひとりにしっかりかかわることによって、より深い理解が得られる教科などで教員が行う指導の補助をしたり、校外活動時の見守り活動などをしたりしています。



■ 事業の背景やきっかけ

introduction

これまでも、学校は地域の皆さんのさまざまな支援をいただいていたが、さらに地域ぐるみで学校を支援し、子どもを健やかに育てていきたいと、市では平成21年度に「大野中学校区学校支援本部」を設置、以降友和小学校区、大野東小学校、佐方小学校区にそれぞれ設置しました。この取組は教員や地域の大人が子どもと向き合う時間を拡充するほか、地域住民の学習成果を発揮する機会でもあり、「地域教育力」の活性化を図ることにもつながっています。



地域コーディネーター
学校支援ボランティア

井上 静子さん



大野 宣江さん



長尾 典子さん



馬杉 征三さん

子どもたちの指導をするのはあくまでも先生なので、先生が教えることが子どもたちにちゃんと伝わるような「支援」を心がけています。子どもたちの笑顔は財産！最近では男性のボランティアも増え、地域の高齢者が再び意欲的に地域社会と関わっていく広がりを感じています。PTAや学生にも関わってもらうなど、支援者側のつながりも広げていきたいです。家庭、学校、地域の3者が手を組めば、必ずよい地域づくりにつながると思います。



苅田 敬子さん

教育委員会 生涯学習課

ボランティアさんたちの力、横のつながり、支援に関わる心構え…本当にすばらしく、感謝と尊敬の思いです。取組をPTAや地域のみなさんにしっかり伝えていきたいです。



内藤 圭太さん

私たちは中間の立場として、教員やボランティアさんがそれぞれの思いをお互いにうまく伝え合うことができるよう、率直な意見を言い合える環境をつくっていくことや、直面した課題について一緒に解決策を考えていくことなどの役割を果たしていきたいです。

■ インタビューを終えて・・・

review

市民の皆さんが持つ知恵と、地域に貢献したいというエネルギーは、本市の財産です。さまざまな知識、技能などそれぞれに持つ得意なことをまちづくりに生かすことができるような環境を整えていくことが大切です。

2012. 9. 12 取材

読書の楽しさを伝えたい！ ～ブックトークボランティア派遣事業～

■事業概要

info

はつかいち市民図書館では、ブックトークボランティアが市内の小・中学校に訪れ、子どもたちに読書の楽しさを伝えています。

「ブックトーク」とは、ひとつのテーマにそって、あるいは何らかの関連性をもたせて数冊の本を選び、それらをつないで紹介することです。その目的は、「読んでみたい」という気持ちを起こさせることです。



■事業の背景やきっかけ

introduction

はつかいち市民図書館では、「子どもたちに本を手渡していきたい」という願いから、開館して以来毎年、「子どもと本の講座」を実施しています。平成21年度にブックトークの勉強会を始め、平成22年度に自主グループを立ち上げ、活動を開始しました。平成23年度から本格的に小学校の授業で実施することになり、地御前小学校と金剛寺小学校の2校へ、平成24年度は宮内小学校、阿品台東小学校、阿品台西小学校、宮島学園、友和小学校の5校へ訪問します。



ボランティアの皆さん

ブックトークボランティア

子どもたちが、読んでよかったと思ってくれるような本や、すすめる価値のある本を選ぶようにしています。紹介する本の傾向が一方に偏らないように気をつけ、幅広く選べるように日ごろから本をよく読みます。テーマの設定や選書、本の紹介の仕方など意見を出し合い、ブックトークが本に手をのばすきっかけになればいいと話合っています。

子どもたちに本を手渡したいという私たちの思いを図書館が実現してくださって、感謝しています。

はつかいち市民図書館



安達 紀子さん

ボランティアの皆さんと一緒に学校に行き、紹介した本をすぐに貸し出せるように準備しておきます。ブックトークの後は、いつも子どもたちが一斉に借りにきて、時には取り合いになることも。とてもうれしいです。子どもたちは忙しく、本を読む時間がなかなかありませんが、小・中学生の間だからこそ読んでもらいたい本がたくさんあります。それをボランティアさんからしっかりと伝えてもらって、ありがたいです。活動していただける範囲をもっと広げていきたいです。

■インタビューを終えて・・・

review

本が好きで、その気持ちを生かしたいボランティアと図書館、「子どもたちに本を読んでほしい」と思う図書館職員と学校、そして、子どもたちとボランティア、一つのつながりから新しいつながりを生み出し、その効果や充実感も2倍、3倍になっていると思います。

2012. 9. 15 取材

おもてなしの心で道路清掃 ～ マイロード事業 ～

■ 事業概要

info

宮島学園（宮島小中学校、児童・生徒数 100 人）は、県道厳島公園線の宮島棧橋から宮島福祉センターまで約 1,000m の区間の「里親」となり、現在、5 年生から 9 年生（中学 3 年生）までの子どもたちが、授業時間外のボランティア活動として、歩道や海岸の清掃「マイロード事業」に取り組んでいます。



■ 事業の背景やきっかけ

introduction

宮島学園では、おもてなしの心を大切に、観光や遠足のルートである棧橋付近から学校周辺と、学校の前の長浜海岸の清掃に取り組んできました。平成 13 年に広島県のアダプト活動団体に認定されて以降は「マイロード事業」として、市の協力に加え県からの活動経費も支援されるようになりました。年 3 回程度行う区間全域の清掃では、2t トラックいっぱい、重さにして 100kg 以上のごみが集まります。



沖野 李帆さん、廣畑 菜々子さん

宮島学園生徒会執行部 (8 年生)

自分たちの通る道なので、清掃をしてきれいになると気持ちがいいし、地域の人に「ありがとうね」と声をかけてもらえると嬉しいです。

上級生と下級生の交流や、地域の人との交流が生まれ、この活動を通じて宮島全体がつながっていくのがよいと思います。スタンプカードや 10 分ボランティアなど、みんなが気軽に自然に取り組めるようにやっています。



柴崎 英紀さん

宮島支所 観光管理課

市は、ゴミ袋の提供や集めたごみの回収と処分を主に受け持っています。子どもたちと一緒に活動することで気持ちがつながり、通学路の危険箇所など急いで対応しようという気にもなります。

市だけでは行き届かない部分を皆さんが掃除してくださり、助かっています。市は業務ですが、皆さんはボランティアなので、無理をせず続けてもらいたいと思います。

■ インタビューを終えて・・・

review

スタンプカードを作りボランティア参加者にスタンプを押す。10 分ボランティアという形で数多く参加の機会をつくる。今日できる人でやり、できないときは無理をしない。というルールを生徒自身で考え、楽しく実践を続けている様子は、他の活動でも大いに参考になると思います。

2012. 9. 10 取材

高校生もまちづくりの一員 ～ 大野みんなのまつり ～

■ 事業概要

info

昭和 55 年に第 1 回が行われました。子どもからお年寄りまでが集まり、地元住民が参加するステージや多彩な催しを楽しめるイベントです。宮島工業高等学校（宮工）の生徒もこのまつりを支える一員として、毎年参加し、第 30 回では建築科の生徒 34 名でツリーハウスのアスレチックを作り上げました。



■ 事業の背景やきっかけ

introduction

平成 15 年、「今までは、高校生の参加が少なく、まつりに若い世代のエネルギーが欲しかったので」と、まつりの事務局が同校にシンボルタワー作成の話を持ちかけました。

ちょうど、地域やまちに、何かできることはないかと思っていた同校との思いが一致し、高校生による作品づくりが始まりました。平成 24 年が 10 年の節目になりました。



3年建築科の皆さん

広島県立宮島工業高等学校

負担が偏り、当初はクラス内で揉めることもありましたが、みんなで頑張ろうと決めて取り組みました。毎日、夜遅くなり大変でしたが、当日は、子どもたちの喜ぶ笑顔を見ることができてよかったです。

地域での活動は生徒たちの学びの場です。本校の使命は

「技心」。地域に出て実践の場で活動させてもらうことで、心が育まれます。地域でのボランティア活動が、当たり前のことになってほしいと思っています。



近藤 明弘先生



辰見 潔さん

大野支所 地域づくり推進課

このまつりで、高校生活の一番の思い出づくりの場になればと思います。大野地域には特色のある地域活動がほかにもあります。

宮工にはいろんな活動に参加してもらっているため、地域の方は、普段から生徒に声をかけやすいのではないかと思います。これからも、生徒が地域へ入りやすい雰囲気をつくり、若い子が地域で活動する、魅力ある地域づくりを進めていきたいと思っています。

■ インタビューを終えて・・・

review

教育の現場は学校だけでなく、地域でも。そんな先生の思いに対して、地域がそれを受け入れています。小さな子どもたちが、学校と地域が協力して行ったこのまつりを楽しんでいました。高校生の姿をみた子どもたちも、いつかは、支える側になってくれるのではないかと感じました。

2012. 9. 12 取材

親子で楽しい交流を！ in 原地区

～はらきっず～

■事業概要

info

はらきっずでは、自然豊かな原地区の地域資源をうまく活用して、未就園児が動植物に触れ合う自然体験学習や、親同士の子育て交流を応援する取組みを実施しています。この事業では、原地区の農業者から田畑を借りるなど、地元住民のサポートを交えることで、住民自らが直接、原地区の魅力を発信する場としての役割も果たしています。



■事業の背景やきっかけ

introduction

「原を想う」「原に住みたい」と慕ってもらえる、未来のまちづくりの担い手となる子どもたちを、地区全体で育てていくことを目的として、平成26年から活動を開始しました。また、原地区の子育て環境の充実化も目指しています。現在では、未就園児のみならず、園児や小学生を対象とした枠も新しく設けたことで、参加者が親子50組を超え、交流の場が広がりつつあります。



藤井真奈さん

原地区在住

「原地区での子育て交流の機会を増やしたい」という何気ない発言を、原市民センターや地区の人が反応してくれたことで、「はらきっず」が始まりました。



中本園芸
中本吉紀さん

年を重ねるごとに、1年間の活動内容が充実していき、参加者である親子の楽しい姿や笑顔にやりがいを感じています。

農業者、保育士、行政の3つの持ち味を出し合いながら、原地区の魅力を引き出しています。そのため、3つのうちどれか1つでも欠けてしまうと「はらきっず」は成り立ちません。お互いに協力していくことがとても大切だと感じます。

原市民センター

「はらきっず」では、子どもたちの純粹に遊んでいる姿や素直に喜んでいる様子を見ることができます。

市の意見をただ押し付けるのではなく、相手と同じ目線になって、気持ちを汲み取っていくことが重要だと感じました。

原市民センターとして更に手助けはできないかと考えています。「原といえば、はらきっず」というイメージを確立していくために、はらきっずに関わる地域の人を増やしていきたいです。

「はらきっず」を通して、原地区の魅力に気づいてくださる人が少しでも増えていくと、うれしいです。



室 浩樹さん

■インタビューを終えて・・・

review

何気ない市民の声に、市や地域の人が反応したことで、大きなまちづくりや交流の場が生まれる動きにつながっていく過程を、お話を聞く中で実感することができました。市民と市がうまくお互いの良さを引き出し合うことは、お互いをよく理解し合っているからこそその成せる業だと思います。「協働」とは、まずお互いの良さを知ることから始まるのだと、今回気づくことができました。

2016. 8. 31 インターンシップ実習生取材

コロナ禍の子育てを応援したい！ ～オンライン離乳食相談～

■事業概要

info

子どもの離乳食をこれから始める方や最近始めた方に、離乳食を作るコツを伝えたり、離乳食に関する悩みごとに答えたりする離乳食相談を、オンラインにより実施しています。オンラインの良さを活かして、保健師と栄養士とで協力しながら子育ての応援をしています。

オンライン 離乳食相談

オンラインで気軽に栄養士に直接相談ができる
「オンライン離乳食相談」を zoom を活用して開催します

■事業の背景やきっかけ

introduction

これまでの来所による育児相談を、新型コロナウイルス感染症による影響で、令和2年3月から中止していました。代わりに電話による相談が増えましたが、お子さんの顔が見えず、適切な助言ができないことが多く、子育て中の方からも「離乳食について悩んでいても、コロナ禍で外出できず、相談会に行けない」との声が。そこで、6月からオンラインによる離乳食相談を開始しました。

広島県西部厚生環境事務所・ 保健所管内地域栄養士会

コロナ禍で私たち栄養士会でも、ITの必要性を認識していました。4か月健診がなくなり、離乳食に不安を抱えている人も多く感じていたところ、市の提案でオンライン相談を始めることになりました。今はまだ手探りで実施している状況で、オンラインの長所・短所に気づけていませんが、離乳食の見本より紙に絵を画いて説明する方が伝わりやすいことも分かってきました。離乳食は子育ての中でもハードルが高いので、オンライン相談を活用してもらい、少しでも不安が解消できればと考えています。コロナ禍が収まっても、オンライン相談は続けていきたいと思っています。準備して、子どもを抱えて外出するのは、とても大変なことです。オンライン相談ならそうした負担が軽減できますので、相談方法の選択肢の一つとして残していきたいです。



佐藤照子さん



陣内菜奈さん

福祉保健部 子育て応援室

オンライン相談のメリットは、保護者が子どもに離乳食を食べさせる様子を栄養士に見せながら、具体的なアドバイスを受けれることです。これは、オンライン相談を始めてから気づけました。もちろん、オンライン相談が苦手な方もいますが、相手に合わせて使い分ければと考えています。今はインターネットの発達で情報が手軽に入りますが、信頼のおけない情報も多いので「ネット情報より専門家による相談」を呼び掛けています。今、子育て中の方々が一人で悩まずに、オンライン上で気軽に会話、相談ができるオンライン「おしゃべり広場」も開設しています。これからも安心して子育てをしてもらえるよう、オンラインを活用して子育てを応援していきたいです。



深井 俊美さん



百合野 さやかさん

■インタビューを終えて・・・

review

新型コロナウイルス感染症は、社会状況の変化を起し、新たな生活様式が求められるようになりました。そのような中で、市民の要望に応えようと、市の保健師と関係団体所属の栄養士と一緒に、オンラインという新たな手法に取り組んでいます。

協力し合って新しいことにチャレンジできるのは、日ごろからお互いが信頼し合っているからこそだと思います。子育てを応援するという目標のもと、両者が役割分担しながら取り組む「協働」の姿を見ることができました。

2020.10.30・11.9取材